

## 白樺サロンの会 設立趣旨

〔名称〕

1. 本会を「白樺サロンの会」と称する。

〔目的〕

2. 本会は、奈良高畑界限に残された遺産の継承とその文化の発展をはかることを目的とする。この遺産とは、とくにつぎの二棟の建物（登録有形文化財）を指す。

① 志賀直哉旧居

② 中村家主屋（旧足立源一郎邸）

〔事業〕

3. 本会は前条の目的を達成するために、以下の事業をおこなう。

① 研究会、講演会の開催

② 冊子、会誌等、必要な公刊事業

③ その他、本会の目的達成に必要な事業

〔会員〕

4. 会員は、本会設立の趣旨に賛同する者をもって構成される。

〔その他の事項〕

5. その他必要な事項について、協議する。

## 白樺サロンの会の活動

（平成26年～平成27年）

\*平成27年度 志賀直哉旧居講座「―名作、名品、生の世界―」

1. 志賀直哉の国語問題とひらがな―文字と文学―

呉谷充利 5月18日

2. 志賀直哉と池田小菊

弦巻克二 6月15日

3. アルベール・カミュの『異邦人』、アルベール・カミュと

『異邦人』

東浦弘樹 7月20日

4. 戦争と美術

平瀬礼太 8月17日

5. 切手に採用された美術品

梁瀬健 9月21日

6. 時空と生命―相対論と量子論から見える時間と空間―

橋元淳一郎 10月19日

7. ヴァージニア・ウルフゆかりの土地、セント・アイヴスと

ロドメル

石川玲子 11月16日

8. 夏目漱石『彼岸過迄』

吉川仁子 12月21日

## 編集後記

東浦弘樹氏「『最初の人間』と『涙するまで、生きる』—アルベル・カミュの小説の映画化をめぐる—」ジャンルを超えた表現がいかにむつかしいか。このことがカミュの文学作品の映画化をめぐる考察されている。志賀直哉は「小説をそのまま朗読する事以外には映画にもテレビにも許可せぬよう」と「直吉への遺言（昭和四十三年八月十三日）」に書く。件の是非は他の機会に譲るとしても、われわれはこの論考において改めて表現がそもそも表現の形式と一体不可分であることに気付かされる。

平瀬礼太氏の「敵を打つ いや敵の像を打つ」を読んで、溜飲が下がるというのはまことにこのことだと思ふ。崇敬の像は裏返してみれば崇敬させるということを暗に示している。歴史は勝者の英雄によって切り開かれてきた。が、勝者は敗者と裏腹である。敗者はこの勝者の像を引き倒すことによって正統性を確かなものにする。もつとも確かのものもつとも危ういものになる、この人間のドラマが氏によってみごとに描かれて、論考は歴史的な一評論でさえある。

呉谷充利「作品にみる神経と心持ちあるいは精神」。谷崎潤一郎と志賀直哉の文学作品が小出楯重の絵画論を交えて論じられる。谷崎は、あたかも「手のひらの中に、この山間の靈氣と日光とが凝り固まった」かのような「一蹀の露の玉」たる吉野の「ず

くし（熟柿）」の美を愛で、志賀は無限の「大きな自然の中に溶込んで行く」精神と肉体の「陶醉感」を大山の夜空の静寂に見る。いわゆる精神と肉体の問題が谷崎の「刺青」と志賀の「暗夜行路」において示されている。

石川玲子氏「ヴァージニア・ウルフの始まりと終わりの地—セント・アイヴスとロドメル」。英国作家ヴァージニア・ウルフの思い出の地を訪れた著者の文学論考。作家と深く結びつくこれらの地を目のあたりにして著者は「ウルフの中の矛盾する様々な思いや性向」を、「彼女の最初の記憶に刻まれたセント・アイヴス／タランド・ハウスと、最後の住居となったロドメル／モンクス・ハウスとウルフの関わりから」見出す。文字としての文学からさらにその原点の風景世界へと還るこうした視点は確かに文学作品に新鮮な一つの扉を拓いている。

翻刻・解説 吉川仁子氏・弦巻克二氏「池田小菊未発表原稿 彼女の犯罪」。名作であると思ふ。今回本号に掲載し明るみに出されたこの作品は小菊文学の頂点といえるものかも知れない。それほどの作品である。自身の罪という黒く淀んだ内面に向き合う主人公のこころの世界がみごとに描かれる。苦悩をただ苦悩として受容するその人間の姿に打たれる。吉川・弦巻両氏によるこの未発表原稿の翻刻は、池田小菊その人の再評価を促すものになると思われる。

梁瀬健氏「切手の失敗作」。「梁瀬式絵葉書切手」（前号掲載）の発案者である梁瀬氏による切手の解説。外国のものを加えて五

千種を越えるこの絵葉書切手の収集家であるその氏が「失敗作」として挙げる切手は、「国体切手（冬季）」（昭和二十四年発行）、「気球揚がる」昭和四十七年発行）、「源氏物語濤標図屏風」（昭和五十三年発行）などである。間違いや不足のない筈の切手の世界で氏のいわれる「失敗作」が出ている。いわんや人間世界をや。不足をもって埋め尽くされている現実の世界。このことにつくづくと思に至る「切手の失敗作」である。

橋元淳一郎氏による「エントロピーと時間―時空とリズムに関する論考（二三）」。この宇宙のはじまり自体にすでに謎がある。「うーん」と思わせられる。解説を引く。「物理法則の中に時間の流れを示唆する法則はないのかといえ、唯ひとつ熱力学におけるエントロピー増大の法則というものがある。（中略）この法則を一言で表した格言は、〈覆水盆に返らず〉である。」時間の流れは物理的世界の中になく、生命が創り出すものであると著者はいう。著者の思考的実験による時間の追究は、じつに人間自身の謎となつて返る。興味尽きない時間論。

（MK 記）